

百六十九年 Utrecht の造幣局に於て Riemsdyk 氏の實驗によれば銅は華氏一千四百廿六度銀は千九百四度に於て熔解するが然れども此等の物質裂隙を填充するに先ち果して氣狀のものなりしか或は液狀のものなりしか未定の問題なり

本邦此種の鑛脈に乏しからず即ち豐後大野郡木浦鑛山及尾平鑛山の如し此兩山に於て其鑛物の主とするものは概ね大古紀 Paleozoic 成層岩と花崗岩と觸接せる所に生せし錫鑛床にして之と相伴ひて種々の鑛物を產す即ち木浦に在りては黃銅鑛 Copper Pyrite 黃鐵鑛 Dron Pyrite 輝亞鉛鑛 Zinc blende 輝鉛鑛 Galena 硫砒鐵鑛 Arsenopyrite 鋼銅鑛 Fahlure 等にして又柘榴石 Garnet は所々に散在し其殊に鑛物學上貴重なるは別須武石 Besuvianite なり尾平にありては斧石 Asinite 及び鐵灰輝石 Hedenbergite と稱する一種の輝石ありて共に鑛物學上貴重なるものなり又外國に在りて此種に屬する鑛脈中最も著名なるは北米 Lake Superior に於ける銅坑にして其處より銅は自然銅となりて産出す又 Nevada, Nefico, Bolivia, Chii, Transylvania 其他諸地方の銀山に於て諸種の銀鑛を產し之と共に多少の自然銀を伴へ其の Lake Superior 地方の火成岩は概ね Dolerite 岩にして銅は此火成岩の裂隙及び其岩壁たる砂岩中より出づ又 Nevada に於ける火成岩は閃綠岩 Diorite と屬せり

(未完)

嶋津泰清公の遺事（續）

含紫樓主人

公の民を憐み給へる、誠に御身に傷みあるやうにればして、務めてその疾苦を思ひやり給ひけり、一

年の冬、毎夜雪ふりしに、公潛に起きて、障子の外に出でよはしるし給ひ、時の移るまゝに、一衣をぬぎ給ひ、明方に至りて、又一衣をぬぎ給ふ、近臣目さめて、これを知り、驚きて、その故を問ひ奉つれば、默然として答へ給はず、程へて夜も明渡りければ、衣帶を改めて、内に入り給ひて、さて近臣に語り給はく、この頃の嚴寒にも、國中には、必家貧しくして、衣をえさる者あらむ、吾常々その苦を思はざるにも、あらねども、かつて身に試みしこともなく、きのふの夜、始めて衣をぬぎて、試みけるに、その寒さ、たへがたくなむ覺えし、吾生れて萬民の上にあり、身に奉くるものとては、なに一つ足はぬあとなく、坐るには、歯をかさね、食ふには、鼎をつらねながら、德政は、いまだ下に治からず、冥加のはども、畏るべきことなり、との給ふ、又ある日、外より歸り給ひけるに、膳等、天氣いと寒かれはとて、豫じめ酒饌を具へて進らするに、公酒を飲み給はんとして、涙ぐみて、の給はく、さきに歸りしとき、たまく道の邊に、あまた乞兒の、雪中に立ち、苦くるを被りて、凍こごい縮くみけるを見て、吾心に、あはれや、と思ひしが、今に忘うつれかたし、それ民は、吾が同胞なれば、凡そ鰥寡孤獨廢疾のもの、皆その養ありて後、わが心も、安かるべきをや、一人だにも、その所を失ふをば、仁人尚もて憂ゆとす、と聞く、いはんや、同胞の民にして、凍饌この極にいたれる者ある、これを何とかいはん、詩に、暫まことにいふな富める人、此の斃獨を哀れむ、とあり、との給ひき、

夏の頃、江戸より歸り給ふとき、一日、道上じよじよ暑かりければ、從者の勞をれもひやり、左右に先づゆきて、木蔭の涼ひんしき所を擇はせて、さて駕を止められて、の給はく、皆々暑を冒あおぎて、遠く來ぬ、さぞ飢ゑ疲れやゑつらん、とて、近臣某に命せて、路店につきて、飲食の物をやらせて、從者にくれ給ひけるに、某、この賜ものは、内殺人のこと候や、御内外をも下され候にや、と御尋申し、かば、公これを聞

きて、不興にねはしめし、徧くこれを與へよ、草履取りの奴に至るまでも、と御意ありしかば、衆皆感悅して、争ひて赴き食ふ、店々の飲食、立ところに空しくなりぬ。既にして、旅館に抵らせらる、乃ち某を召されて、の給く、吾さきに、汝に命して、從者に食をくれさせけるに、汝との與ふへき人を問ふ、吾が國內の民は、祖宗よりこの方、數百年間、撫育し給へる民なり、町人百姓に至るまで、皆吾が一家なれば、内外の別あるへきやは、まして供の者をもをや、然るに、汝との内外を分けしは、いかゞ、説あらは、聞かんとの給ひしかば、某、恐れりりて、答ふる所を志らす、公、汝知らすして失言せしは、猶恕すへし、後來は必ず言に謹ますば、あるへからず、諸士にして、この事を聞きたらんには、必、汝を容さぬぞよとの給ひしどぞ。

公下を遇し給ふに、常に信を守り給ひ、事は必ずから先にし給ふ、外に出でんとし給ふ時などは、必行裝を調へ、時刻を報げくれば、直ちに出て給ふ、故例に、城北の吉野に狩りして、武事を講することなりしが、公必往きて、これに臨^ミ、風雨の日といふとも、かつて往き給はずといふことなし、平生、頗獵を好み給ひ、しばし遊獵あり、その場につき給へば、輜^{アシ}をすてゝ徒步して野獸を逐ひ給ふ、ある時左右止め奉りて曰く、士卒多し、御前只指麾遊はされてこそ然るへく候へ、必しもみづから苦勞し給ふへきことにや候へき、と申せども、聽き給はず、休ひ給へば、草を藉きて御坐あり、左右因りて歯を進らすれば、從臣も皆これに坐するか、と御尋あり、左やうには候はすと、申せは、さらばとて、郤け給ふ、嘗て暴雨^{ボウガ}にあひて、衣袂皆濕ふ、左右馳せて、民家に入り、蓑笠とりて進らす、公顧みて、の給はく、竹内助市、つねに我に誨ふ、人に君たる人は、衆と共に苦樂を同しくし給ふへしといへり、吾との言を守りて、敢て忘れされは、この物、無用なりとて、召し給はざりき、

諸士に罪を得て、自殺を賜はりし者は、公必、朝より服を改めて坐し、惻然として憂色あり、この日は、政をも視給はず、且、宴飲もなく、笑言もし給はず、嘗て侍臣に語り給く、吾聞く、先祖の大中公、松齡公、皆恒に申されしは、我が三國を定め、社稷を安んするゆゑは、我、一人の武功にあらず、皆諸士忠戦の力なりとすむ。今、余その餘功に因りて、優游日を暮して、安樂を享くる、その思いと大なり、故にその子孫あへを待らふには、たのづから厚からざるをえず、苟もこれを薄くせば、是れ先祖の意に違ひて、罪をみだまの靈に得るなり、然れども、其の中に、或は憲のりを犯して、罪を得る者あれば、法は曲くへからざるによりて、これを死に處するなり、これ洵まことにに己おのむとえざるに出づることなり、との給へば、左右これを聞きて、皆感涕を流しけり、

常に諸士の子弟を召されて、その武藝を校閲し、異等の者には、褒賞を賜ひて、その餘を勵まし、畢れば、悉く御前に召されて、從容として、御物語あり、或は酒を飲ませて、各その志さす所を言はしめて、その才器を観たまふ、或はその名を呼ひて、の給はく、汝が祖は、それの役に軍功ありし、汝が父は、奉公を大切にして、私曲なかりし、汝等勉めて、その家聲を墜すなよと、各その人に因りて、懇に教を加へ給へり、その人を用ひ給ふ、常に質直を先にして、浮華を黜け給へり、嘗て小姓の闕ありて、その者を擇ひ給ひけるに、ある人、某が子、才辨ありと申して、薦めしかば、彼の子は、不可なり、幼にして才辨ある者は、後には多く令器を成せぬものなり、重職に至りては、尤才辨を取るは、宜しからず、と仰せらる、

碇山次右衛門、公に仕へまつること、尤久しかりしが、かつて云、公の徳の美なる、大に人に過ぐる者あり、何とも形容なりがたし、平生進謁することに、その徳に薰かきり、覺えず心化す、よりて、れのれは、

公の前にて、譲諭をなし。若くは私曲を訴へんとするとは、萬々すへららずトナモヘリ、或は時ありて、御側に侍り、從容として徳音を承はるときは、覺えず時を移し、心中懸々として退るに忍ひず、その徳、是の如くなる故、人々中心に服して、皆その死を致さんことを思へるなり、平生、群臣を待らひ給ふに、寛恕を極め、小過は、毎に容隱し、嘗て譴責を加へ給はす、常の御詞に、小過を救さすば、人に使ふべき者なしとぞ、の給ひし、その已を治め、物に接し給ふには、必、言行相應じ、内外一のほどく、讐間にねはしても、その御物語は、必道徳に依り、嘗て聲色玩好戯慢の事に及び給はざりき、太夫人、伊勢氏、既に薨じ給ひて、寛陽公、再、京師の平松氏より、娶り給ひしに、公より六歳、少かりわかかも、これに事へまつり給ふこと、所生の如し、平松氏も、恩情天至、相共に始終を全うし、纖毫の間なきりき、

姫侍聲樂に於ては、一も愛き給ふ所なかりき、年十七歳にて、伊豫候の松平氏みなかみが女めのめを娶り、相待らひ給ふこと、賓の如く、閨門肅穆にして、五男四女生ませ給ふ、性尤儉素くわいそを尚び、自奉甚薄し、宮室園囿より、駒從、服飾、器用の屬に至るまで、皆その舊に因りて、廣め給ふ所なし、或人、別館を營みて、游息に供へ奉らんと請ひしらは、財を費やし、民を勞す、別館は、万々用なしとの給ひき、

江戸の町に、火事ありて、芝邸を延焼す、公、火を避けて、上邸に赴き給はんとて、馬に騎りて、出て給ふ、先驅返り来て、いはく、前路人填ちて、行きがたく候へば、轉じて高輪邸に御出ありて然るへく候へ、と申しつかば、何の行きがたきことあるべき、とて、鞭を揚げて叱咤して馳せ給ふ、是に由りて、從騎も悉くこれに效ひて行く、群集せる人、左右に披靡たゞらきて、直ちに上邸に達することをシタマツたりとぞ、平生好みて武藝の講習あり、嘗て槍を學び給ひ、劍士東郷善助を召されて、與に技を較べ給はん、とあ

りければ、善助、固く醉み奉りて、是れ臣を以て君に敵す、と申す事に候へば、いかに仰せらるとも、この命のみは、奉じかたし、と申上けられども、許し給はす。然らば、是非に及び候はず、とて、俱に塲に上る、公槍を擧げて、善助に當り給ひければ、善助木刀を持ちてこれを支へ、跳り入つて、公の兩臂を連打に打ち奉り、すなはち頸首して、御臂は痛みも候はざりしかと申上けられば、いや／＼、此の如くならでは、技を較ぶとも、益なし。よし／＼、との給ふ、その事に臨みて、英姿奮發、武將の風あること、此のごとし、善助は、世々劍術の師範を務めし者、既に終りて後、公の槍法は、よのづねにねはしまるす、としばらく物語りけるとぞ、

(未完)

信する所と明にす

大野禕一

馬蘭條約一たび成て、漢山の風雲未だ收らず、密雲疊々、雨ふらんと欲ゑて未だ雨ふらず、赤電時に雲間に閃きて、未だ殷々轟々の聲を聞らず、是正に時第せんと志て英才を思ふの時、我國育英の任に當り、將た人物を以て世を匡濟せんと欲するもの、人材の多うらんを願ふの秋なり、是時に當り當時懷抱する所を明にして以て其人に質す、豈益なからんや。

歐大陸の西北岸頭に位し、ビスケイの灣荒波激濤天を排する處、潮流の洗ふ處、環海千里、纜を繋ぐべきの港、碇を投すべきの灣、沿岸に出入し、萬國の船舶此に輻湊し、萬國の商賈此に集る、其市邑の多き一千有余、其の倉庫の夥しき普く天下の物産を堆積す、其市街の肩摩轂擊晝夜車馬囂々たる、其製造業の繁盛なる、陸には百萬の貔貅を列ね、海には數千の艨艟鐵艦を浮ぶ、其勢宇内を包舉し、其威一